校長研修だより１１

感動を演出するパラダイムシフト

2021・5・31　　重枝 一郎

私は，この福岡女学院に来た。みなさんも過去そうであったように。なぜ？と言われても，たまたま感はある。しかし，この「偶然」をクリスチャンは「必然」，つまり，「神様のご計画」と言う。

私のこれまでも，出会う必要のなかった人は一人もいないと思っている。必要でなかった経験は一つもないと思っている。私は，この学校に来たことを「会うべき時に，会うべき人に会っている」と出会いをポジティブに捉えている。この感覚，考えは，これまでもそうであった。出会いをネガティブに捉えることは，とてももったいないと思っている。先生方も双方向でそういう感覚，考えになっていたらうれしい。

先日，図書館でこれまでの卒業アルバムを見た。目的は，先生方の顔を見たいからである。昔のまで見た。先生方とずっと前から知り合いのように思いたいからである。

さて，タイトルの『感動を演出するパラダイムシフト』についてだが，先生方の経験則でもきっとそうだと思うが，感動には大きなパラダイムシフトがつきものである。例えば，「楽しみにしていた映画を見に行って，実につまらない映画でガッカリした」という経験はないだろうか。おもしろいと思って楽しみに見に行ったら，おもしろくなかったときは，本当にガッカリである。逆に，「つまらないと思っていたら，おもしろかった」ときはどうだろう。たまたま時間つぶしに見た映画だったが，そのおもしろさに感激し，期待以上に感動し・・・これはパラダイムシフトである。つまり，パラダイムシフトとは，「パターン化した視点がガラッと転換すること」である。「思い込みがひっくり返ること」とも言える。

「授業＝つまらない」「上司＝わからず屋」みたいな思い込みは，一つのパラダイムである。それが，「授業＝おもしろい」へ転換するとき，人の心には感動が生まれ，行動する原動力を生む。一般的に転換の度合いが大きいほど感動は大きくなる。

大きな感動を与えるためには，パラダイムシフトを起こす必要がある。先生方が授業改善工夫をしようとするときは，無意識的にこのパラダイムシフトを行っている場合が多いのではなかろうか。

パラダイムシフトが起きるケースはいろいろあるが，次の３つが代表的である。

① 無意味→意味付加
今まで，無意味と思っていたものに，突如意味を発見したとき。
例えば，ドラマで序盤のなんでもないシーンが実は伏線になっていて，それが最終的にドラマの結論のカギになっていたとき・・・感動

② 複雑→単純
一見ややこしいことが，実は単純だったとき
物事が複雑なほど「要はこういうこと」と気づいたとき・・・感動

③ 見えない→見える
例えば，数学の確率の問題も，それが実際の賭け事へ応用できると知れば，突然見えるのだから，目からうろこで，数学に対して・・・感動

私たちは（教師・生徒），もともとの固定観念，パラダイムが崩れ，代わって別の価値観が生まれるとき感動する。それが，教師の教える力と言えるかもしれない。